ふるさと（霞ケ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第117号（2016年2月）

風に吹かれて（95）

・苞葉の割れて紅梅の薄目をひらいて

白井啓治

今年ほど梅の花の咲くのを楽しみに待ったことなかった。苞葉が割れて紅色の筋が現れたのだが、未だ花は開いてくれない。一日、二日の中には薄紅色の花が見られるかと毎日見上げているのであるが、明日こそはと期待すると小雪がちらついたり、目覚めると薄っすら雪化粧だったりで、苞葉の割れるのは早かったのだが、いまだに花は開かずである。

鶯が梅の枝に現れたが、野鳥ではまだ鳴かない。下手くそな鳴き声でも「ケキョ」と声してくれたら梅の花も思わずほころんでくれると思うのだが。

先日、新聞だったかネットの記事であったか忘れたが、「ほめてダメになった日本の若者」とあった。おや、と思い読み始めたのであるが誰かの投稿文のようで、あまりにも底の浅い主張だったので読むのをやめた。日にちは忘れたが、おそらく成人式の後ではなかったろうか。「ほめて育てるはダメ。ほめると子供はダメになる」とあった。

しかし、人は評価され褒められて良くなっていくものであるが、どうやらほめたらだめと主張している人はほめるとはどういうことなのかを学んでいないようであった。

ほめることと甘やかすという事は全く意味の違うことなのであるが、どうやらこのほめて育てるはダメ、と主張する人は同義にとらえているらしかった。

子供たちをほめる意味とは、人としての感性、創造力、作文力を伸ばしてやることだと小生は思っている。

子供たちを育てるというのは、尺度を当てて良いとか劣っていると指摘し、没個性の人を育てることではない。

役にも立たない定規を当てて「ダメだ、ダメだ」と言ってみたり「良く出来た、良く出来た」と言っても創造性豊かな人には成長しないものである。

子供を叱るも褒めるも育てる上では重要なことではあるが、叱るにしろ褒めるにしろ大事なことは定規を当てて尺度して叱ったり褒めたりするなという事であろう。

以前にも紹介したことがあったと思うが、子供たちへの絵画教室を開いている知人が云っていた。子供たちの絵を見る時は必ず両手で受け取って、両手で持ってその絵を見るのだと。絵を片手で受け取り、片手に持って見ると、空いている手が必ず絵のある部分を指して、自分の形にはめようという意識が生まれてくるのだそうだ。その子の感性を捻じ曲げてしまうというのである。

文章でも同じことが言える。人は、自分が理解できない言葉に出会うと直ぐに反発したり、否定したり、無視したりするものである。しかし、言葉とは理解できなくても声や文に発せられれば、つまらぬ定規を当てない限り、その言葉の心を感じ取ることができるものである。

叱るための定規だけを金科玉条のごとく持ち歩くのは止めたいものである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ケ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400

兼平智恵子　0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会　http://www.furusato-kaze.com/

21世紀に失望（2）

菅原茂美

【先月号（①テロの横行②国連の無力③安易な文明の利器）に続く。】

④地球温暖化

世界は今、地球の温暖化をどのように捉えているのか。異常気象や島嶼の水没、熱帯病の発生地域拡大など、身近に迫っているのに、切迫感が足りないように見受けられる。

現在、世界の常識として地球温暖化は、化石燃料消費による温室効果ガスの濃度増加が最大の原因とされている（＊1）。しかし以前は、利害が反する業界同士の陰謀説など、応酬があり、人為的な温暖化ガスの増加が地球温暖化の主原因説には異論もあった。しかし今日では、二酸化炭素（CO_2）濃度の増加が、地球温暖化を増進する…と、明確に定義づけられている。

（＊1）：CO_2は赤外線を吸収するので、地上から宇宙へ熱が拡散するのを防ぐため、温室効果ガスとして働く。産業革命直前(英国1860年頃)の大気のCO_2濃度は、280PPM(0・028%)であったが、現在は381PPMである。155年間に36%増えた。それをしっかり認識すべきである。

＊

さて地球温暖化原因については、人為的な化石燃料消費拡大によるCO_2濃度の増加が最大原因と確定されたが、更に海水温上昇により海底のメタンハイドレート（MH＝メタンガスと水が氷ったもの）が解け出したら、温室効果を一層増大させる。ペルー沖の海水温が上昇するエルニーニョ現象により、台風発生個数は増加し、2015年は27個。1月から12月まで、毎月発生したのは、統計を取り始めてから、64年間で初めてとの事。

所で、メインエンジンの故障などあったが「金星探査機・あかつき」は、健気にも金星観察を続けている。それによると、金星表面温度は、太陽に近いせいもあるが470℃である。金星大気のCO_2含有率が、96・5%もあり、それが金星温暖化の最大の原因になっている。

今、地球大気のCO_2濃度は、0・04%で、産業革命突入直前より、平均気温が0・8℃上がっている。これが2℃上がれば海水面上昇は40㎝、高波被害も大きく、海抜0メートル地帯は深刻な問題となる。まして、各国がCO_2排出規制努力を怠り、もし、今世紀末に5℃も上昇という事になると、海水の膨張や南極などでの解氷により、海水面が1㍍以上も上昇する事になる。これは海抜の低い地帯にとって死活問題である。

更に中緯度の文明国においても、マラリアなど熱帯病が蔓延したら、手の施しようのない混乱を招くことになる。今、マラリアは世界70か国で、毎年2・8億人の患者が発病し、毎年75万人が死亡している。マラリアによる死亡と考えられる著名人に一休宗純、平清盛、ツタ―カーメン等がいる。

【中国の屠ク科ヨモギ属のクソニンジンから抽出した解熱剤「アルテミシニン」が、驚異的にマラリアに効く事から2015年、中国人として始めてノーベル賞生理・医学賞を受賞した。】

＊

さて現在世界各地に台風や竜巻など、歴史上記録にない…などと形容される異常気象が連発している。集中豪雨とか、逆に長期干ばつとか「気象難民」を生み出す勢いである。海水温が上がれば水蒸気が蒸発する。蒸発した水蒸気は雲となり必ず雨となって地上に降りる。気圧の壁に阻まれ、雨雲が移動しなければ、集中豪雨となり巨大な災害をもたらす。自然災害も巨大隕石落下とか火山噴火とか人知の及ばない、やむを得ない現象なら仕方ないが、短絡的な人間の欲望で化石燃料の消費過多によるのであれば、叡智の働かない人類の愚かな行動という事になる。

人類の愚行の為、人類のみが滅亡するのなら天罰としてやむを得ない話であるが、巻き添えを食って他の動植物も絶滅する事になれば、真に罪深い話である。地球の長い歴史を考えれば、栄華を誇った「種」は、いつかは必ず滅びている。

【直近5億年間に、全生物の7～9割も生物が絶滅した例が5回もあった。原因は急激な温暖化又は寒冷化や海水の酸欠などである。急変する環境変化に、進化がついていけなかったからである。】

皮肉な話であるが、6500万年前、巨大隕石落下により恐竜が滅びたおかげで、哺乳類が繁栄する「空間」が出来、今日の隆盛を見ている。もし哺乳類も恐竜とともに滅亡していたら、ゴキブリが天下をとっていてもおかしくない話である。そう考えると、前号で書いた安易な文明の隆盛により自然を破壊し、資源を枯渇させる現在の人類は、思慮深い賢者とは言えない。折角進化を遂げ、物の善悪を判断できる知能を獲得したのなら、もっと大局的な視野を持ち、自分の「棲みか地球」を大切に保持する努力が必要である。

そこで2015年COP21（気候変動パリ会議・196か国・地域参加）の結論は、1997年の京都議定書では先進国のみがCO_2削減義務を負ったが、今回は全締約国が自主削減目標を立て、5年毎に見直し目標を国連に提出し、国内対策の

実施を義務付けた。先進国には厳密な数値目標を求め、途上国には将来的に先進国同様の目標を掲げるよう促す事とした。そして産業革命前に比べ、今世紀末の平均気温上昇幅は2℃を十分下回り、1・5℃に抑える努力をする…とした。これを受け、日本は、温室効果ガスの削減目標を、２０３０年までに13年度比で26％減を宣言した。余談だが、ニュージーランドは、人口より羊の数が多いため、羊のゲップやオナラも温暖化の大きな要因とし、羊に大きな税金をかけ、対策費にあてている。

２０１３年、全世界のCO_2排出量は322億トンである。そのうちワースト1位中国が28％。2位アメリカ16％。3位ＥＵ10％。4位インド6％。5位ロシア5％。そして日本が6位4％である。以下韓国、カナダ、イラン、サウジアラビアの順である。今、中国はじめ発展途上国の大都会は、スモッグで50メートル先のビルがよく見えない状況にある。日本でも１９７２年頃、石油コンビナートからの硫黄酸化物などによる四日市喘息で、苦しんだ経緯があるが、経済がいくら発展しても、国民が健康を害したのでは何にもならない。途上国は先進国の苦い先例があるので、早々に国民を守る足固めに全力を注ぐべきである。

さて温暖化を減少させる対策だが、一人一人が、小さな行動でも直ちに実行に移すことだ。暖房を減らす。車に余り乗らない。ごみを少なくする。衣食住をできるだけ簡素にする。こういう事の積み重ねが地球を救う事になる。少し大袈裟にいえば、第6回目の生物大量絶滅を防ぐ事になる。

＊

⑤進まぬがん対策

極楽とんぼの私は、医学の進歩により、「がん」など21世紀になれば、殆ど解決しているだろうと目論んでいた。これは凶悪な幾多の感染症が、見事に解決した前例があるので、早とちりした能天気な願望でもあった。

【１９８７年、科学技術庁は各界の専門家に、ほぼ30年後（２０１５年頃）、科学技術はどこまで進歩しているかをアンケートし結果を公表した。その主な推測は●空飛ぶ自動車●人間と対話できるロボット●マグニチュード7以上の地震は数日前に完全予告●宇宙空間での太陽光発電所●月面に宇宙観測用恒久基地建設。そして医学関係では●糖尿病根治可能●認知症治療法を開発。そして、●がん制圧…となっている。これらは今日、2番目のＩＴを搭載したロボットと、ある程度の会話ができるだけで、他は殆ど大外れ！　日本人口など1千万人も多く見積もっていたという。専門家達も21世紀初頭には、がんは制圧できていると見ていたらしい。】

それが蓋を開けてみたら、どっこい問屋はそうは卸さない。今、日本国民の二人に一人はがんになり、3人に一人はがんで死亡している。医学がいくら進んでも厄介な病気が「がん」である。長生きすれば、それだけ細胞がストレス（活性酸素など）を受ける機会が多くなるので、ＤＮＡが傷つき、がん化するのであろう。

私は両親・兄姉を、がんで亡くしているが、64歳で前立腺がん、79歳で膵臓がん。更に現在、悪性リンパ腫という3回目のがんに取りつかれている。幸い娘夫婦が共に医博。孫二人が医学生のため、日頃関連話題は多く、しっかりサポートを受けている。お陰でこれまで超早期発見・早期治療で事なく済んでいるが、ちょっと間違えば、既にこの世にはいなかったかもしれない。

＊

がんになりやすい体質とか、生活習慣や環境要件がどのように影響しているのかなど、まだ良くわかってはいない。しかし私はいまだかつて一度だってタバコを吸った事はないし、不適正な生活習慣は、かなり注意してきた。しかし3度もがんにやられた。

【成人してからの私は、雀荘での副流煙による受動喫煙は、今思えば残念な事であった。ある報告では受動喫煙により、世界中で毎年60万人、日本で９５００人が死亡しているという。特に女性の51％は家庭で受動喫煙により「慢性閉塞性肺疾患」などの被害を受けているという。】

細胞は、発がん物質や身の回りの放射線などにより、常に多くのストレスを受け、ＤＮＡは傷つきやすい。しかし傷はついても通常なら修復機能が働き、簡単にがんは進行しない。常に体内では、がん化した細胞を駆除する機能と、それに対抗して、細胞増殖機能昂進や抗アポトーシス作用の戦いが行われている。アポトーシスとは、異常細胞への自爆命令である。その命令に従わず、異常細胞が増殖昂進すれば「がん発症」という事になる。

そこで私の考えであるが、日本は憲法の制約もあり軍備を持ったところで知れたもの。周辺国の強欲な独善行動も気に障るが、国防費などを削って、ただ一筋「がん対策研究」に全力投球し、全人類に貢献する研究開発に専念してほしい。安全保障は国連の監視機能に任せておく。日本は十分に予算を使い、ただひたすらにがん研究に励む。その方がはるかに全人類の為になる。

＊

⑥人口過剰

現在の日本は、毎年約100万人生まれて130万人死亡している。少子高齢化とか限界自治体（65歳以上が人口の50％以上）とかが問題にされている。それなのに人口過剰とは何事か…と思われるかもしれないが、目を世界に向けてほしい。現在世界人口は73億人（推計）だが、毎年８５００万人（18％）ずつ増えている。現状は地球1･4個なければ収容できないほどの人口過剰である。国連の推計によると２０２５年には81億人、２０５０年には96億人、２１００年には109億人と予想されている。この地球の収容能力を大幅に超している。

これまで私は、世界から争いが絶えない最大の原因即ち諸悪の根源は、「人口過剰」にあると述べてきた。今から3千年ほど前の日本列島に、縄文人はおよそ10万人住んでいたという。それが大陸で幾多の王国が盛衰する間に、戦争難民即ち弥生人が列島に大挙して押し寄せてきて、まるで敗者復活戦を演じるように、この列島で戦いに明け暮れる日本人を生み出した。列島先住民は弥生人により混血吸収されて行った。人口密度を増せば、縄張り根性が強くなり、人類の醜い闘争本能が頭をもたげてくる。

それゆえ私は、経済発展をもって国是とする現状を憂い、もっとゆとりのある、穏やかな国家像を強く望む。人口が増え経済が発展し、競争主義に追い回され、国民は過労死まで引き起こして、成果主義の奴隷にされる。こんな人生はまっぴらだ。現在の日本人口からみたら、縄文人の人口は１０００分の１である。この石岡市は現在８万人だから、縄文人並の人口密度なら80人という事になる。もし20人くらいの集落なら、わずか4集団という事。これなら縄張りが重複する事もなく、平和な生活が営めるであろう。隣の集団がどんな宗教を信じようが、全く関係なし。

まさか本気で世界人口を千分の1に減らせ…とは言わないが、今から２００年前の10億人くらいの人口なら、もっと穏やかな世界情勢になるのではなかろうか。交通機関も狂ったように高速でなくともよいはず。地下に潜り更には他の惑星までも侵略しようなどとは夢々考える事はなかろう。全人類を何百回も殺せるような核兵器の備蓄競争に明け暮れる愚は、絶対にあり得ないだろう。

地球に生命が誕生した当初から、生き物とは、周囲から栄養を確保し、自分の発育・繁殖に役立て、そのために必要な「縄張り」を保持してきた。従って一定面積に個体数が増せば、必ず自分が生きていく最低限度の「縄張り」を確保するため、争いが生じる。これが生命活動の原則だ。

そのため利己的な遺伝子が益々発達し、周囲と争う事が生命の原則とは真に悲しい運命である。折角人類は「文明」を築いてきたのだから、もう少し知恵を働かし、誰でもが平等で、この世に生を受けた喜びを分かち合いたいものである。

戦争の絶えない愚かな人類。移民・難民の問題は地球が抱える最大の課題だ。悉く人口過剰が原因。文明の進んだ国が、後進の国土を侵略し、生命・財産を略奪する図式は、何としても許せない。特に欧州白人が南北米大陸の先住民９０００万人のうち、9割を殺害したという。これほどの悪事を重ねていながら、今、世界の主役とは、何ともおかしな話。

さて私がもし小説を書くとすればＳＦ。利己的な遺伝子に支配され、強欲に貫かれた人類も、己の欲望を満たすため、環境を破壊し、資源を枯渇させ、滅亡寸前まで追いやられた。文明国ほど水没・退廃が早く、高山地帯の清廉な人類の一部が生き残り、新たな人類がリセットされる。新人類は性欲・食欲が極度に控えめで、平均寿命３００歳。高温に耐えるため身長3㍍・体重30㎏。頭には、トサカが生え、放熱し、パンダじゃないが、カロリーの少ない笹などを主食とする…。人為的地球温暖化とは、これほど罪深い事なのだ。

私は世界平和こそ究極の願望としてきた。争いのない穏やかな生活こそ、最終目標とする。折角大脳を発達させたのだから、殺し合いをする愚行は、何としてもこの世からなくしたい。もう少し欲望を縮小し、もっと慎ましやかに生きるべきだ。

＊

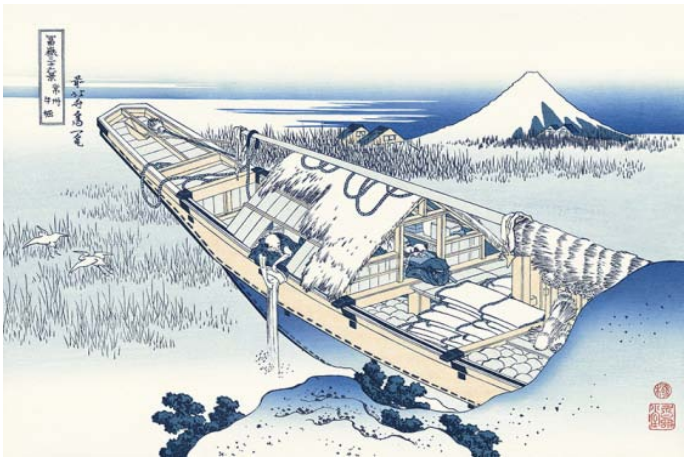
以上6項目について縷々述べた。他にも安全保障、年金介護、宗教戦争、資源枯渇など難問は多々あるが、紙幅の関係もあり、今回はここまでにしておく。21世紀を迎えても未だに進化しない人類の横暴を見るにつけ、辛口すぎたかもしれないが、日頃感じている不満をぶちまけた。

人類は農耕牧畜の定着を始めて１２０００年。ほぼ500世代を重ねても、これだけしか進化しなかった。贅沢を覚えた人類に明るい未来はない。穀物を食べれば人が10人生きられるのに、穀物を家畜に与えその肉を食べれば一人しか生きられない。贅沢をしたいがために人は争う。次世代は温厚な動物であるゴリラにでも、地球のリーダーの座を譲って、荒々しい人類とチンパンジーは引退するのが、適当かも知れない。次の地球の王者は、人類の犯した跡を二度と踏まぬよう、ただ祈るのみ。

地域に眠る埋もれた歴史（11）　木村進

常州牛掘と横利根川（一）

常州牛掘という名前は葛飾北斎の富嶽三十六景の中の1枚のタイトルだが、霞ヶ浦の情景が見事に表されている。この絵を基に今の牛掘り地区（潮来市牛掘）を散策した。



葛飾北斎　富嶽三十六景　「常州牛堀」

牛掘は常陸国風土記で「香澄の里」と言われた風光明美なところでもある。昔は香澄村と言った。現在では富士山が見えることは稀だが、筑波山と水鳥などの風情は今も昔をしのぶことができる。

また霞ヶ浦水運では潮来に隣接した風待ち港として多くの旅人がここから銚子などに向かった。潮来とは別な魅力がある街である。

○　北斎と巴水

牛掘は現在潮来市だが、霞ヶ浦の水運が栄えていた時にはここからも舟が各方面に出ており、大変にぎわった。吉田松陰は水戸から鹿島を通り潮来で一泊して牛堀から舟で息栖を経由して銚子へ行き、日本の防衛に無防備な状況を嘆いた。

江戸-銚子-潮来間は大型の船が行き来し、また東北方面からの荷物も積みかえ港としての潮来の役割は重要だった。この潮来で底の浅い高瀬舟に荷を詰め替え、各店の屋号をつけたたくさんの高瀬舟が各方面に出ていた。

葛飾北斎の絵にあるようにこのあたりからも富士山が昔は良く見えた。

この絵は水郷牛堀地区の朝の風景を描いたもので、舟で寝起きをし、朝早く米のとぎ汁を舟から川に流しているその情景と、その空気感が伝わってくる。

また版画家「川瀬巴水」は好んでこの牛掘地区を描いた。「雨の牛堀」（昭和4年）、「牛堀の夕暮」（昭和5年）などがある。

○　北斎公園

今の牛堀地区には常陸利根川に面した河岸を細長く整備して「北斎公園」と名付けられた緑の芝生の公園がつくられています。

巴水の絵に近いようなところを探してみた。

・蔵を利用した喫茶&レストラン「蔵」

・蔵を利用したイベント会場「北斎遊学館」。

蔵の壁は大谷石で造られており昭和初期に建てられているそうですから、川瀬巴水の版画にある建物なのかもしれません。

細長い「北斎公園」。右側の街路樹のある辺りが昔の河岸のようです。

この公園部分は川の部分にテトラブロックのようなものを沈めて、その上に土と芝生で公園部分を作りだしています。この牛掘地区から霞ヶ浦は川（常陸利根川）となってこの先下流20㎞ほど先で利根川に合流します。

この川の対岸には水門があり、常陸利根川と平行に流れる利根川とを結ぶ運河のような川、横利根川が佐原の方にむかって流れています。そしてこの横利根川が茨城県（稲敷市）と千葉県（香取市）の県境になります。但し公園部分の道もせまく、手前に駐車場は設けられていますが大きな公園ではありません。

○　常陸利根川

常陸国のことを常州という表現はあまり見かけないのですが、江戸時代には結構使われた言葉なのでしょう。江戸時代には江戸から香取・鹿島・息栖の「東国三社詣で」の船が出ていました。江戸からは江戸川で関宿まで舟で上り、そこから利根川に入って、香取神宮は佐原で陸に上がればよく、鹿島神宮へは水郷地帯を通って潮来にやってきたようです。

芭蕉が鹿島紀行で旅した時は、行徳から陸路（木下街道）を千葉県布佐まで行って、そこから利根川を舟で下って行きました。関宿まで行くより、こちらの方が近いからです。

この牛堀は霞ケ浦の出口部分にありここから常陸利根川を下り、銚子の少し手前で利根川に合流します。昔は霞ケ浦には大小さまざまな舟が行き来していました。

蒸気船が導入されたのは明治になってからで、江戸時代は大型の千石船や底の浅い高瀬舟がたくさん行き来していました。
小林一茶が 1817 年に鹿島詣でのあと鹿島から潮来まで小舟に乗り（大舟津ヨリ舟渡　六十四文）、潮来から大きな船で銚子に行っています（卯上刻出船　二百六十四文　未下刻銚子ニ入）。銚子より少し西の牛堀からは今では横利根川が流れています。昔もこの川はあったのだと思いますが、今の運河のような整備されたものではなく水郷の外浦などと繋がった入り組んだものだったのではないでしょうか。また流れる方向も逆だったようです。

○　牛堀界隈

潮来市牛堀の北斎公園をあとにして少し周辺を散策してみました。常陸利根川から脇道に入ると旧道沿いに昔のイメージを感じる建物が散見されます。少し山側に入ったところに昔小学校であったところに出ました。ここには牛堀第一小学校がありました。
今は銚子市立図書館となっています。
小学校の体育館を改築して平成 18 年に図書館としてオープンしました。
平成 16 年（2004 年）にこの牛堀第一小学校と第二小学校、八代小学校の３つが統合して新しい牛堀小学校を建設したようです。
この図書館の敷地にある人物の銅像が置かれていました。小堀進画伯の銅像。絵筆を持って絵を書いている姿です。昭和初期の代表的水彩画家で初の日本芸術院会員となった人です。
潮来市大生の出身。１年の半分ほどは何処かに出かけていて風景などを好んで描いていたそうです。
空の構図が大胆なものが多いですね。
写真の構図でもとても参考になりそうです。

○　牛堀対岸（横利根川入口）

常州牛堀（潮来）は霞ケ浦が銚子の方に流れる常陸利根川の入口に当たります。昔も霞ケ浦を通った高瀬舟はここから常陸利根川を通って途中利根川に合流して銚子または利根川を上って江戸まで船で行けました。しかし銚子の方まで行くのは時間もかかるため、ここから利根川を結ぶ横利根川が整備されました。また、利根川が多雨で氾濫するとここを通って霞ケ浦が増水して土浦や高浜は洪水被害が絶えませんでした。そのため、この横利根川の両側に水門ができ、さらに霞ケ浦の堤防の高さを整備して今ではほとんど水害は聞かなくなりました。さらに常陸利根川と利根川が合流する地点手前に両方の川に大きな水門を設置して、利根川が増水した時に霞ヶ浦に逆流しないようにしたのです。しかし、この目的に海水の逆流も考慮されたりしたため、逆に門を締め切っていると霞ケ浦の水質がどんどん悪化して、以前海水浴ができたこの霞ケ浦も昔からは全く想像もできないような水質の悪化が起こってしまいました。土浦も高浜も夏場にはアオコが発生して近くを通るにも悪臭がする状態が続いています。これも最近の努力で一部改善はされてきています。堤防も整備が行なわれたので水門の長時間開放を検討する時ではないかと思います。
さて、昔の牛堀のイメージが多少残る対岸に行って、反対側から牛堀を眺めてみました。このあたりは昔の牛堀の雰囲気が残っています。
川沿いには葦などの水草が生え、水鳥もたくさんいます。近づくと一斉に逃げ出します。上流側には国道 51 号線の橋があり、この橋（北利根橋）の向こう側が霞ケ浦です。このあたりは常陸風土記に書かれている「霞みの郷」の言葉が良く似合う場所です。国道 51 号線は水戸から千葉までを結んでいますが鹿島神宮と香取神宮を結ぶ道でもあります。常陸利根川から横利根川に入る入口には水門があり、昔は舟が通る時に開けていました。今でも観光用に時々舟が通るようです。こちらの水門は新横利根閘門といい、反対の利根川出口側には国の重要文化財に指定されているレンガ造りの「横利根閘門」があります。

○　治水の父（須田誠太郎）

国道 51 号線の常陸利根川に架かる橋は北利根橋といいます。橋の西側は霞ヶ浦で東側が常陸利根川になります。そして橋北側の町が牛堀でその少し東が潮来の町です。この牛堀地区は、少し前までは「香澄村」と言いました。やはりこのあたりの風景が香澄の郷なのでしょう。北利根橋の南岸から土手に沿って霞ケ浦の方に少し入ってみました。その堤防のすぐ左手に「須田誠太郎翁治水功労顕彰碑」が立っていました。この顕彰碑の形は少し変わっていて四角と球形の形を組み合わせたものとなっています。これは「水は方円の器に随う」という意味を表しているといいます。水は四角の器であれば四角になり、円形の器であれば円形になるという意味のようです。器を作るのは政治家などで水が人民というようなことのようです。為政者はよく考えてよい器を作っていかなければならないのでしょう。明治 14 年に牛堀村に生まれた須田誠太郎。当時水害がたびたび襲いこの

あたりは満足な米が採れるのは3年に1度くらいだったそうです。そこでこの常陸利根川と利根川を結ぶ横利根川を整備させ、横利根閘門の設置に大変尽力した方だそうです。そしてその功績から茨城の偉人（治水の父）と呼ばれています。

水郷や香澄たなびく霞ケ浦も穏やかな時もあれば風雨で荒れる時もあります。しかしこうした治水の努力で今では水害もほとんどなくなりました。霞ケ浦を一周する堤防もほぼ完成しました。自転車で走ったら一周できるのではないかとおもうのですが、陽気がよくなったら一周してみたいものです。

○　横利根川

霞ヶ浦から潮来方面に流れ出る川を北利根川とか常陸利根川といいます。これは前に書きました。そしてこの北利根川（常陸利根川）と利根川とを結ぶ水路が横利根川です。霞ヶ浦の水運はある時代からは、ここの横利根川から利根川に入って上流に上るルートが中心ともなったようです。今でも時々この先にある横利根閘門を開けて観光船が通ることがありますが、普段は静かな太公望のメッカとなっています。

午前中でしたが陽は大分高くなっており、水面に太陽の光がまぶしいくキラキラ反射していました。川の流れは静かでのどかで、ゆったりと流れ、釣り船がいつもたくさん浮かび、岸でもたくさんの釣り人がいました。まさに絵になる風情の場所です。

霞ヶ浦の水運も土浦、石岡（高浜）より船で出て、利根川に入るのに、この横利根川を通ると常陸利根川と利根川の合流地点まで（ここから20㎞位先）行かずに済みます。横利根閘門はこの前後の水位が調節されています。この閘門は洪水の防止などの目的で大正3年から大正10年にかけて造られました。また近くに公園が設けられていて、そちらに行けばレンガ作りのすてきな閘門が見られます。また公園は香取市と稲敷市の共同での管理となっているようです。またこの水門は上下に開くのではなく、真中から左右に開きます。霞ヶ浦の水運としてたくさんの客船（蒸気船）もこの横利根川を通ったそうです。しかし、それも昭和10年頃までで、鉄道や車に押されて衰退し、今では時々観光としてこの門を通過する船が時々ある程度だといいます。

○　横利根閘門

横利根閘門（こうもん）を少し詳しく紹介します。霞ヶ浦が水運で発達していた頃、霞ヶ浦から常陸利根川を下って銚子近くで利根川に入って利根川を関宿（千葉県野田市）までさかのぼり今度は江戸川を下って江戸まで物資を運んでいました。この常陸川から利根川に入るルートを短縮させるために、二つの川を結ぶ横利根川が整備されました。それまでも横利根川はありましたが、流れる方向は逆で利根川から常陸利根川へ流れていました。そして利根川の増水した時に霞ヶ浦が逆流して洪水を起こすのを防止するためにこの横利根閘門（こうもん）が作られました。大正3年から7年間もかかって完成しました。霞ヶ浦の明治から大正にかけての大改修事業のシンボル的な水門（煉瓦造閘門）です。

この水門は現在も現役で、保守・部品交換もされて維持管理されています。

平成6年には開閉の自動化が行われました。もうほとんど使われる機会は少ないが、国指定の重要文化財に指定されている貴重なものです。レンガ造りはやはり趣があります。船は片側の閘門から侵入し、一旦中間部で停船して水位を合わせます。横利根閘門は上下に開閉するのではなく「くの字」に折れたように前後に開閉します。この頃造られたレンガ造りの建造物は大変趣がありますね。関東大震災以降ほとんどがコンクリー造りになってしまっていますので今残されているものは大変貴重なものです。

（次回に続く）

師走の漁場を行く

伊東弓子

いよいよ今回からかすみがうら市に入る。知る人も少ないが、新治郡出島村という頃、青年の集いで歩崎へ向かう道だったので、若い日の記憶が蘇ってくる。当時の友も農業に、嫁に行った先で主婦として頑張っている便りもある。

いつもの事ながら下調べに出かけた。

三ツ谷には三軒の河岸があった。下河岸、中河岸、中河岸新宅だ。下河岸は何度か尋ねた。洗濯物が乾してあったが人に合うことはなかった。今日は先ずお婆さんに合えた。

「そういうことは爺さまの方がよくわかるよ。田の方にいっから」

とのこと、田を畑地にした所に空豆を植えている爺さんの姿があった。気持ちよくいろいろと話しをしてくれたが「来春、この豆を食べるのが楽しみで植えてんだよ」と明るい声だった。

お婆さんも出てきて話しに加わった。
「高崎から来たの、高崎におみっちゃんという友だちがいんだよ。若い頃はよく行ったり来たりしてたんだが、お互いに年とったからな」
私も知っている人なので話しておくことを約束して、車を置く場所の許可も貰い後にした。昔話に出てくるご夫婦のようだった。中河岸は人気もなく、犬もいない様子だった。中河岸新宅は若い世代が苺の生産でビニールハウスが何棟か建って活気あるのを感じた。十年前はお老寄夫婦が元気で、河岸のこと、椎の木山のこと話してくださり得意気だったことを覚えている。
ここから高架津、小津、柏崎まで直線の堤防が続く、又漁場が多いのもこの辺から先だ。漁場のあった頃の地形はもっと変化にとんでいたろうし、豊かな漁の恵みがあったろう。本当はここをまっすぐ歩きたかったが、台の古墳、館跡、車の止める所も考えてコースを変更した。寒い時期で車を利用の声も多かった。
宍倉城跡の入り口は細く長い道で車は入れない。道と大きな屋敷の木の葉を掃き集めている女の人がいる。百メートル位行くと段差があった。館跡は畑で四百年の時刻を静かに伝えていた。周りに人家や建物のないことが気にいった思いだ。
高架津に入ると魚売りの車が来ていた。歌謡曲が部落中に響いている。集まってきた女たちの前で手際よく切り身を作っている男は得意そうだった殆ど人に合わなかった。
小津も田の中にまとまった半農半漁の部落だった。小津を「こづ」とよんでいたが、地元では「おづ」と言うのだと教えてくれた。
「水戸藩玉里御留川」の本が出来上がり、記念講演のお知らせを配って歩いた時、立ち寄った家で、ご夫婦が覚えていてくれた。その嬉しさとお茶をいただき喉の乾きを潤してくれた暖かさも頑張っていることへの褒美だと感謝した。
「爺さんや親父がいろいろと話してくれた。台の方には寺や神社も多い。文化財になっているものも数ある。安食八景もある等、地元で生活してきたからこそ愛着も湧いて、もっと知りたい、もっと聞きたいと思ったもんだ。だけど俺が話をしたい相手、息子や娘は一緒にいないし、もう終わりだな」
とぼそぼそと小さな声になった。
「俺も大井戸の方へはよく行った。漁が少ない時は八木へ廻った。あそこはとれたよ。隣りは、藩河岸でこの辺の米を高浜へ運んだ。その先は高瀬舟で恋瀬川を上り水戸へ運んだそうだ」
その足で柊塚まで行ってみた。柊塚の左側に葡萄のビニールハウスがあって、大井戸から見る時の目安にしていたが、こんなに破れていては目安には出来ない。しっかり柊塚を見つける力を養わなくちゃならない。
台に上がった。古い通りはこの地域の繁華街だと思われる。寺子屋があった結構大きな構えの店だった。かすみがうら地域が終わる時、みんなでご馳走になろう。地域で頑張っているお店だから。
かすみがうら市総合資料館へ挨拶に行くことにした。池上先生が、「御留川の講座」を開いた時、三～四回伺った所だ。忙しいらしいが資料室に案内されて「歩く会」のことを聞いてもらったり、助言もいただいた。帰り際には本も貸してくださった。奥で男女五～六人づつが作業していた。市民学芸員の話を聞いたことがあるが、この人達のことだろうか。故郷の歴史、文化を大切に考えている町の姿がわかる。羨ましい限りだ。
とっぷり暮れた田舎道を走った。向う場、高崎の灯が待っていてくれる。
いよいよ実施十二月十三日（日）をむかえた。雲も低いし、予報もよくないがめげずに出発した。ＪＡ南支所から相乗りして三ツ谷にむかった。
六兵衛川はこの三河岸の東側だろうと想像して眺める。
下河岸のご夫婦は用事があって、留守のことは前もって分かっていたので、犬と挨拶を交わした。この河岸からは醤油が主に荷積みされていた。台にある「椎の木山」から牧が江戸へと運ばれていったそうだ。
「草を刈っておいてくれたよ」と気が付いた人がいて、みんなに伝えてくれた。本当に心ある人だと有難く思った。
隣りの中河岸は、これから行く宍倉城主の流れをくむ家だとか。庭を借りて屋敷先の河岸跡まで進んでいく。目の前は田あり蓮田あり水をたっぷり貯えていた。舟が出入りしていた様子がよくわかる。水辺に大きな柳があった。堤防手前にも柳がしっかりのびている。
中河岸の新宅という隣りは、時代にのって若い人が頑張っているのだろう。参加した男の人達が冠木門と言っている。痛んだ処を繕い、崩れた所を直して大切に扱っているのがよくわかった。
昔、土浦で丑寅合戦があったそうだ。その時、どちらかの娘さんがこの三河岸のどこの家に嫁に来たとか、その暗い道を上がると「風返し」だ。あちこちに風返しという地名があるけど、何でかな、等耳に入った。

枯草を踏みつけながら大きな建物の傍の道を上がった。畑の奥の林の中に、風返し大日古墳が横たわっている。どなたが眠っておられるのか。今の世の中なんと思っておられるか。

上がり下りやくねくね道、出島東の台の古い通りだ。入り口から紅葉した楓を見ながら、宍倉城へむかっていたが、お借りしたい場所がある大屋敷の庭に入った。木々の話し、管理の苦労など弾んでいた。なんじゃもんじゃの木も珍しく、遠い昔庄屋をされていた面影も残っていた。

宍倉城跡は、平で広い畑で周囲が木立で守られている様にも見えた。暖かい冬の中で蝶が飛んでいた。堀の後を歩いて行くと眼下に田が広がり、その間に菱木川が右の川上から左の柏崎河口、そして霞ケ浦に流れている。先人の知恵や力が、こういう地形を選んだのであろう。

「よかった。一度も来たことがなかったので」と女の人の声が耳に入った。街道はくねくねとし、坂も上り下りが多かった。

地元の人が「予定から外れるがこの道沿いに、竹内百太郎の家があるのでどうでしょう」と案内してくれた。

突然の訪問にもかかわらず当主は気持よく受け入れてくれた。冠木門が歓迎してくれたが、その大きさには驚いた。一枚板、一本造りの素晴らしさに男の人達は話しが盛り上がっていた。

百太郎の話しを中心に、時代背景や商売のこと、当主が東京で会社経営をし支えてきた事、管理する苦労、今後の心配など尽きないとのことだ。醤油、薬を作り、川に竹内家の川岸もあった。

百太郎の墓、竹内家の墓、時代を通して仏教関係から神道へ変わり、これから自分の入る場所と、竹内家の人々の眠る静かな一角を後にした。

河岸跡の案内をして下さるとのことで、台から川へ向かった。高架津部落舟溜りの東に車を止め、

「ここから見ないと当時の様子は感じられないのです」

と堤防から田の方に目をおき、あの坂を下りこの河岸から舟は銚子や江戸へ行ったとの話しの中に当時の人々の姿を思い浮かべた。漁場見方もこのようにゆっくり進めたいものだ。

「出はこれで失礼」と、送ることは必要ない、毎日の散歩コースだと歩き出し田に下りて行く姿は、七十代後半と驚いた。姿勢のよさ、足の運びのリズム感、どこかに武士の筋が入っている方だった。あれよ、あれよという中に草紅葉の美しい田の中に小さくなっていった。

小雨がパラつきだし時間の遅れも響いてか、少し焦り出した雰囲気だった。高架津には「ぬかり川」「しん川」「宮久保上川」の漁場があったことを話し、それらを左手に想像しながら後にした。

小津には「宮久保下川」の漁場がある。「宮久保」聞いた名だと地元の人の声だった。あらためて確かめに来よう。

小津の公民館に車をおいて歩く予定だったが、柊塚近くに直行することにした。

柊塚は小型の古墳で、田のすぐ傍にある。みんなで大井戸の稲荷の森を捜したが、霧がかかって見えにくかった。この柊塚と稲荷の森を結ぶ線が、水戸藩御留川の境とした所だ。宮久保上川、下川付近で小川船頭が網を破った事件があった。小津の漁師をしていた人の話しでは、

「今でもあるよ。水もん（水の中にあるもの）は、証拠もないし、境もないし仕様がないんだ」という。

又、高架津、小津は小さい猟しかないけれど、何ていっても柏崎、田伏の漁には敵わないそうだ。規模もでっかいし、勢いがいいよ。言葉だって荒いし、声もでっかい、強いよ、おっかないようだとの話しだった。今も漁をしているのはいると聞いた。ある人は取れなくて、古渡の方まで行ったそうだ。あっちの方はよくとれたという。「古渡」懐かしい名を聞いて、気持ちが晴れていい話しを紹介した。

小津の東外れに稲荷さまがあった。そこに松の切り株が残っているという。ごく最近切ったそうだ。その松は最後の一本だったという。小津から八木の方へ松原がずっと連なってあったという。それは見事だったと古老に聞いたそうだ。筑波の峰がその奥に聳え、波が打ちよせ、砂浜は光っていたろう。天女の舞はどうか、村の娘も男や女達もいきいきしていたことだろう。

現実に戻って今回の反省をしてみた。散らしの誤りを訂正しなかったのは、参加者に不安を与える結果になることはまずかった。

地元の人の案内もその土地ならではの発見やそこに興味のわくきっかけとなるよい機会だった。

遠くでの歩く会となると下調べや交渉で時間がかかる。幸い妹の心くばりに甘えてやっているが、アッシー君が必要だと思う時もある。募集したい思いもない訳ではない。師走の忙しさの中で、短時間の取りくみに協力していただいたこと身にしみる今回でした。

蜘蛛の子を散らすように分かれてしまった。

県指定文化財（10）

兼平智恵子

平成二十八年一月八日(金)～二月二十八日(日)迄、石岡市ふるさと歴史館（石岡市民会館裏側に位置しています）にて第六回企画展として「〝ジャーメ〟こんな行事があったのか！」と題して行われています。この珍しい題に引き付けられご来館の皆さんが続いています。その中でも市内の皆さんほとんどが「ジャーメってなあに？」「こんな行事があること知らなかった！」。

果たしてジャーメとは…。どうぞ皆さんご来館の上お確かめ下さい。

尚、二月十三日（土）～三月三日（木）まで石岡市中心市街地では「いしおか雛巡り」が行われます。石岡市まちかど情報センター特設ステージ恒例の「歴史絵巻情景飾り」をはじめ、商店街の皆さんの思い思いの展示で、皆さんのお越しをお待ちしております。是非雛巡りと併せてふるさと歴史館にお立ち寄りください。歴史館は十時～十六時半まで、入場無料になっております。お待ちしております。

それでは昨年十二月の第一一五号に続きまして、県指定文化財をご案内いたします。

○石岡の一里塚　　史跡　昭和三三・三・一二

石岡市教育委員会平成十年三月三一日発行の「石岡市の文化財」によりますと……一里塚は、江戸時代初期に全国主要街道の両側に造られたもので、一里ごとに置かれ当時では旅の目印になった。石岡の一里塚は、脇街道として敷かれた水戸街道沿に造られた。両方の塚の上には榎の大木が残り、現在でも当時の姿を偲ぶことができる。樹齢約四〇〇年と推定される榎の幹周りは約四・二m、高さはおよそ二〇mを測る。

水戸街道は、江戸から約三〇里、道幅三間の広さをもち、水戸以北は岩城街道で陸奥相馬方面と結ぶ重要な街道であった。石岡の一里塚のように街道の両側に残っているものは、全国的にもたいへん珍しく、江戸時代の交通事情を知る上で貴重な文化財である。……

この文中にある樹齢約四〇〇年の東側の榎は残念ながら平成十四年七月の台風で倒れてしまいました。現在は四〇〇年の榎の種から芽を出していた苗木を移植し二代目として大空に向かって生き生きと成長しています。

「西側の塚の榎は、枯死して、今は無く、目通り周囲一尺五寸位の松があるばかりである。」と、石岡史蹟保存会編「石岡市郷土資料」の第一号より第三九号までを著述された今泉義文氏の第九号に記してあり、この原稿の執筆が昭和三十三年から同四十八年にわたるものである事から、昭和三十年代頃には無くなって、その後に植樹された榎でしょうか、現在は榎二本が雄々しく生い茂っています。

昭和三十年代後半に、一里塚近くに嫁いだ方に伺いましたらその頃には大木はなく、塚の上にはお茶の木がありましたが間もなく、道路拡張の為（この頃杉の切り株が残っていた）狩り取られ整地された。二本の榎は飛んできた種からの発芽ではないか、さだかではないとのお答えでした。

残っていた杉の切り株は昭和三十年まで、ここから先（水戸方面）約二kmにわたり由緒ある杉並木があったそうです。

徳川時代、街道の並木として松並木はありましたが、杉並木は日光以外にはこの府中（現在の石岡）だけに許されたものでした。これは「御三家」の一つ水戸徳川家の分家である府中藩主松平播磨守頼隆の当時の地位の高さを物語っているそうです。

また杉並木一里塚より北方一町（約一〇九m強）程の東方に巨大な老松があり、延齢の松と云う。これは水戸藩主徳川斉昭公が江戸への往来に、この松を非常に愛賞讃美され、このように命名されたものでしたが、明治十五年、惜しくも雷火の為枯死してしまったそうです。

更に、杉並木を進むこと、延齢の松の反対の西方幾分か北よりの所に、水戸様方が休憩されたと言う〝茶屋場〟がありました。現在では石岡保健センター通り過ぎて間もなくの信号に茶屋場住宅入口として残されてありました。左折してすぐの右側に、五、六件の古住宅があり、すでに壊されて空地となっているところが多くありました。石岡の地名（石岡市教育委員会発行）によりますと、昭和三十年代付近が住宅地として開発される以前は、高さ三尺位の土手で三方が囲まれた二百坪位の茶屋場跡が山林の中に残されていたという。

杉並木跡、延齢の松跡、茶屋場の跡として石岡の一里塚同様、貴重な文化財として遺すべきと強く感じました。

・ふりかえり振り返り孫二人　初登山

・応援香　水仙数多　　智恵子

旧霞ケ浦海軍航空隊本部遺跡巡り　小林幸枝

昨年、父から石岡にも軍の飛行場が二か所あったと聞いて、見て回りましたが、今回は阿見町にある霞ケ浦海軍航空隊本部を見に行ってきました。

霞ケ浦海軍航空隊は、大正11年（1922）に設立された航空部隊で、昭和20年（1945）の終戦まで航空隊要員の操縦教育を行っていました。

ここに本部が置かれたのは、海軍航空隊も水上基地だけでなく陸上飛行場を持つべきととの考えからでした。

霞ケ浦海軍航空隊の飛行場には、昭和4年（1929）世界一周中の飛行船ツェペリン号がやって来て、係留中の4日間で20万人もの見物客が訪れたといいます。また昭和6年（1931）には、チャールズ・リンドバーグも来隊しています。

昭和4年（1929）3月14日、石岡に大火が発生しましたが、この時、霞ケ浦海軍航空隊も消火活動のために出動したそうです。

霞ケ浦海軍航空隊本部の遺跡の殆どが現茨城大学農学部の敷地にあります。茨城大農学部敷地内にある遺跡は、

①方位盤（阿見町指定文化財）
②旧霞ケ浦神社跡
③地下防空壕跡
④第一士官宿舎階段親柱（阿見町指定文化財）
⑤軍艦旗掲揚塔（阿見町指定文化財）
⑥皇太子殿下（昭和天皇）御手植えの松
⑦50メートルプール跡
⑧海軍航空殉職者慰霊塔
⑨貯水池跡
⑩旧宿舎門・柱跡
⑪有蓋掩体壕（阿見町指定文化財）
⑫霞ケ浦神社社殿（中郷の阿彌神境内）

です。

旧中央格納庫（戦闘指揮所）は井関農機茨城センター内にありますので、受付に入所申請してから車で、遺跡に行きます。戦闘指揮所の建物は奇麗に保存されており、壁には弾痕などもたくさん残っています。

旧霞ケ浦海軍航空隊本部遺跡巡りの案内パンフレットは、阿見町役場に行くと貰うことができます。

興味のある方は一度見学される事をお勧めします。史跡を巡りながら戦争と人間などについて考えてみるのもいいのではないでしょうか。

【風の談話室】

《読者投稿》
私の国府巡り「越前」　京都府精華町今井　直

「旅は鬱気（うっき）を晴らし、英気を養う」と、言われる。私はご当地グルメを味わうのが大きな楽しみであり、英気を養う源のひとつである。石岡では「やさと蕎麦」の味が忘れられない。機会があれば、「新そば始めました」の貼り紙が出る時期に、ぜひ常陸秋そばを味わってみたい。

蕎麦の人気ランキングを検索すると、「越前おろし蕎麦」が群を抜いて第一位だ。福井県の武生（たけふ）・今庄（いまじょう）・越前大野などそば処は、必ずおいしい伏流水に恵まれている。挽きぐるみの蕎麦の香りがひときわ高く、たっぷりの出汁と辛味の大根おろしに削り節・青ねぎの薬味をのせた、素朴な田舎そばだ。

昭和天皇は、越前そばが大の好物だったらしい。終戦後、陛下は日本の復興を願い、精力的に全国各地へ慰問の旅をなされた。昭和二十二年秋に福井へ行幸された際、食糧不足の折、恐れながらとおろし蕎麦をお出ししたところ、陛下は大層お気に召され、なんとお代わりを所望されたそうだ。その後も事あるごとに、「あの越前そばが…」と話題にされ、「越前そば」というネーミングは昭和天皇によるもの……今庄駅前のそば屋の頑固おやじに聞いた話である。

越前は日本海の荒波が打ち寄せ、山がちで平地が少なく冬は雪深い。人々は厳しい風土の中で耐えて暮らしてきた。今でこそ品種改良が進み、「コシヒカリ」や「華越前」など旨い米がとれるが、元々稲が育ちにくい土地で、昔から稗（ひえ）や粟（あわ）、蕎麦で命をつないできたと言う。秋の日差しを浴びた蕎麦の花は誠に美しく、つらい心を和ませたことだろう。

干ばつが何度も続いた奈良時代、元正天皇が詔（みことのり）を出している。「全国の国司に命じて、人民に晩稲（おくて）・蕎麦・大麦・小麦を植えさせ、その収穫を蓄えおさめて、凶作に備えさせよ」（続日本紀）――蕎麦が、わが国の文献に初めて登場する資料である。

福井県は蕎麦の生産量が茨城県に匹敵するほど多く、越前そばの名店も数知れない。旨い蕎麦を求めて通っているうちに、いつの間にか私の興味は、古代から息づく歴史と文化の世界へも広がっ

ていった。

古代、氣比（けひ）神宮（福井県敦賀市）から、彌彦（やひこ）神社（新潟県弥彦村）までの、日本海に面した地域は、「越国（こしのくに）」と呼ばれていた。中央集権国家を推進するため、七〇一年に大宝律令が制定され、越国は都に近い地域から越前・越中・越後の三国に分割された。その後、越前から加賀と能登が分立し、越前と越中に挟まれる形になった。

『和名抄』に、越前国について「国府は丹生（にゅう）郡に在り、行程上り七日、下り四日」とある。国府が置かれた武生に都より国司が赴任し、徴税や治安維持の仕事を担っていた。都から近過ぎず遠過ぎずの距離だが、愛発関（あらちのせき・敦賀市）の前後は険しい山道で、往来は極めて困難だった。七日間も費やして、調（ちょう）・庸（よう）など貢納品を都に運ぶのは、大変な労苦であった。

武生は平成の大合併により、越前市と名が変わった。JR武生駅の西側はゆかりの地名が数々あり、総社や国分寺もあることから、越前国府の有力な推定地である。市街地であるために本格的な発掘調査ができず、国庁の位置や規模など正確なことは未だ判明していない。駅からすぐの市役所には、地名の由来を示す「太介不乃己不（たけふのこふ＝武生の国府）」の碑があり、古代歌謡・催馬楽（さいばら）から抜粋したものだ。

総社大神宮は、立派なたたずまいで格式の高さがうかがえる。境内には「越前国府」と刻まれた大きな石碑がある。一方、その北隣にある現国分寺は、どこかから移転してきたのか、本堂があるだけだ。越前は大国だったから、往時は七堂伽藍が甍を並べる壮大な寺院と思われるが、文献すら伝わらない。

さらに野々宮廃寺など古代寺院の遺跡が三カ所ある。いずれも出土した古瓦や塼仏（せんぶつ＝浮き彫りの仏像）の破片などから、国分寺建立の詔より五〇年以上も前の白鳳時代中期と確認された。既にその当時から、この地に大陸から伝わった仏教文化が根付いていた証しである。

また越前は、紫式部が生涯でただ一度、都を離れて過ごした所でもある。長徳二年（九九六）、国守（くにのかみ）に任ぜられた父の藤原為時（ためとき）とともに、越前国府へ下向した。紫式部は当時、多感な二十歳のころ。都とは異なるひなびた自然の中で何を見聞きし、どう感じたのであろうか。『源氏物語』浮舟の巻に、「武生の国府に移ろひたまふとも、忍びては参り来なむを」と、越前国府が登場する。

越前国を調べていて驚いた。実は、越前国府に関連して国の史跡に指定されたものは一件もない。発掘調査による確証がないからだ。越前だけでなく、越国五カ国の国府はすべて未だ確定されていない。国府の所在地と比定されている越前市・小松市（加賀）・七尾市（能登）・高岡市（越中）・上越市（越後）の五都市は、定期的に「こしのくに国府サミット」を開催し、情報交換をしながら調査活動を進めているそうだ。

六世紀初めに、あわや皇統断絶の大危機があった。武烈天皇が崩御すると皇位継承者がなく、やっと、越前にいた応神天皇の五代の孫にあたる男大迹王（おおとのおう）を見つけ出した。即位して継体天皇となり、皇后は武烈天皇の妹である手白香皇女（たしらかのひめみこ）である。二人の間に生まれた欽明天皇の血筋が、今日まで続くことになる。推古天皇は孫、聖徳太子はひ孫にあたる。

JR武生駅から約8㎞東に、継体天皇ゆかりの味真野（あじまの）の里がある。この閑静な山里は、熱く切ない万葉恋歌の舞台でもあった。下級官僚の中臣宅守（なかとみのやかもり）が見初めた相手は、男子禁制の宮廷に仕える狭野茅上娘子（さののちがみのおとめ）だった。たちまち二人は激しい恋に落ち結婚した。禁断の高嶺の花に手を出した罪で、宅守は越前国味真野に流罪となり、茅上娘子は都で一途に宅守を恋い慕い、帰りを待ち望むことに…。遠距離恋愛の二人が交わした熱烈な恋の歌は六十三首に及ぶ。（万葉集・巻十五・3723〜3785）

帰りける　人来たれりと　言ひしかば
　ほとほと死にき　君かと思ひて

我が背子が　帰り来まさむ　時のため
　命残さむ　忘れたまふな

茅上娘子の歌は、激しく心の底からほとばしる叫びだ。「帰ってきた人があなたかと思い、気を失うところでした」「また逢える日まで、私は必ず生き延びましょう！」万葉集の中でも屈指の愛の絶唱だろう。一方、これほど激しく想われた中臣宅守は、

塵泥（ちりひぢ）の　数にもあらぬ
　われ故に　思いわぶらむ

妹（いも）が愛（かな）しさ

「取るに足らぬ僕のせいで、途方に暮れている君が愛おしいよ」と、典型的な草食系男子だが、茅上娘子への愛は純粋である。

武生の味真野地区には、二人の恋歌をテーマにした「万葉館」があり、街角ごとに万葉恋歌の碑が建っている。住民は子供の頃から万葉歌に慣れ親しんでいるのだ。

そして、味真野小学校のエドヒガン桜！校庭のド真ん中に鎮座する一本桜で、樹齢はゆうに百年を超える。時の移り変わりを見つめてきた老翁のような姿で、他を圧倒する存在感だ。三年前訪れた時は、偶然にも入学式の日で、まっさらな一年生が満開の桜をバックに記念撮影をしていた。六年間毎日、この巨樹を眺めながら成長してゆく子供らは、この上なく幸せである。

A boy meets a girl under the cherry tree.

（桜の下で芽生えた初恋）――そんな小さなラブストーリーが、ここで誕生するだろうか。

養生日記

堀江実穂

「光を求めて」
暗闇の中にいた私
先の見通しがつかない日々
もどかしさに苦しむ
いつも不安がつきまとう
心が折れそうな時もある
正月休みに実家に帰った
両親のぬくもりに触れて心が癒されていく
暖かい手料理
心が温まっていく
正月で弟も顔を出した
私のためにカニと手作りのパンを持ってきてくれる
大豆を使用したパンで、カロリーも低く肥満の私を気遣ってくれる
弟の気遣いに涙が出てくる
家族の優しい愛情をもらい、自分自身への希望を思うことができた
光はただ求めても照ることはない
自分で光はともさなければと正月に今年の計を思う

「ぬくもり」
最近結婚した夫婦がいる
デイケアで知り合って愛が芽生えた
交際2か月ぐらいで入籍した
二人のラブラブぶりは見ている私がドキドキしてしまう
二人は、結婚したてで生活も楽ではないだろうに、よく人を呼んで手料理をふるまってくれる
私も何回も二人にお呼ばれされている
つい最近も私を食事に招待してくれた
美味しいパスタと飲み物を用意してくれた
三人で話に花が咲いた
笑顔いっぱいの家庭のぬくもりを私にも分けてくれた
笑顔とぬくもりのある暮らし
私に希望を見せてくれた

《風の呟き・風の囁き》
「琴バウアー」

菅原茂美

大関「琴奨菊」が最後の塩の前、上半身を後ろに大きく反らすルーチン動作は、荒川静香のイナバウアーにヒントを得、更にラグビー・五郎丸のキック前に手を合わせ、精神集中する動作にも、刺激されたと言われる。マスコミは早速この動作を、「琴バウアー」と名付けた。

私は、琴奨菊の日本出身力士10年ぶり優勝に心から喝采を送りたい。あの集中力に心から感動した。日本国技大相撲は、あまりにも長い間モンゴル勢に圧倒されっぱなし。特に朝青龍・白鳳の不遜な態度には横綱の品格がなく、立腹この上なし。

それにしても、日本出身大関陣の腑甲斐無さは、これまであまりにも酷かった。殊に豪栄道と琴奨菊は、角番を何度も繰り返す、お荷物大関に見えた。協会の大関昇進基準が甘すぎたのでは…といつも思っていた。実力はありながら、郷土力士、稀勢の里の取りこぼし定番も切歯扼腕。

所が今回の琴奨菊の優勝である。新聞解説によれば、無数の怪我で、その克服に尋常でない努力がなされたとの事。縦軸がぶれないための筋力アップ。確かに琴奨菊は横に逃げたりはしない。真っ向ガブリ寄りを決め技とする。

この一連の経過から、私は、自分の人格を疑った。人の表面のみを見て、評価する愚か者。日本人力士に大和魂は失せたのか…とコキ落としてきた浅はかさ。ならば自分は、これまでどれほどの努力をしてきたというのか。公務員だったため、常に「法律」をバックに、押し通してきた。それが社会の秩序ではあるが、自分の懸命の努力で、艱難辛苦を乗り越えたわけでは、決してない。

アポトーシス（細胞の自爆死）

菅原茂美

癌に関する論文は、読めば読むほど混迷。分子生物学に精通しなければ、なかなか理解できない。簡単に纏めると、「癌」は上皮由来の悪性腫瘍で、「がん」は、がん一般をさす。英語では Cancer。

日本では毎年26万人のがん新患者が出るという。人は60兆個の細胞からなり、その数を維持するために、老化して死亡する細胞数と、生まれ代わる細胞数を一定に保つようコントロールされている。体に良くない生活習慣（肉食、塩分、喫煙、飲酒、血糖の過多）は、細胞に大きなストレスとなり、ＤＮＡを傷付ける。するとＰ53という遺伝子（がん抑制遺伝子）等が変異を起こし、細胞の増殖をコントロールできなくなる。Ｐ53はＤＮＡの修復や細胞増殖停止などの重要な機能を持つ。人とほぼ同じ寿命の象に、がんが少ないのは、このｐ53が人の19倍も存在するからとも言われる。

さてアポトーシスとは、ギリシャ語で枯葉などが木から落ちる事を意味する。即ち多細胞生物が個体をよりよい状態に保つため、「プログラム化された細胞死」の事である。例えば人類も先祖を辿れば、魚類→爬虫類→両生類→哺乳類→霊長類→ホモサピエンス…という事になるが、魚類のヒレが変化して人の指になった訳なので、魚類時代の名残として、胎児の時には指の間に水かきがある。しかし陸に上がった哺乳類には水かきは不要。そこでその水かきの細胞には、発生過程で、自殺がプログラム化されている。オタマジャクシが蛙に変態する時も、尾の細胞は、自爆死を命じられて尾はなくなる。

我々の体内では、活性酸素や発がん物質などにより、健康な細胞は毎日のように大きなストレスを受けている。そのため細胞の遺伝子が傷つけられ、健康な人でも毎日数千個の細胞が遺伝子変異を起こしているが、通常は人の免疫機能により、異常細胞は自爆死（アポトーシス）を強いられ、除去（自然治癒）される。

がんは誰でも数十年も前から体内で生まれては消され、それを繰り返すうちに、抑制が効かなくなるとがん化する。老化した細胞が若い細胞に置き換わるのを促進する作用と、過剰に分裂しないようにコントロールする作用とがバランスよければ健康を維持できるが、細胞分裂を促進する作用が圧倒的に勢力を増せば、がんになる。しかし、もし細胞ががんになっても、素早くそれを免疫機能が見つけ出し、異常細胞には自殺命令が下されるが、頑固ながん細胞は、その自殺命令を拒否する。その勢いが強くなれば「がん」が発生する。

以上のようにがんは、極めて偶発的なもので、遺伝的に明確ながん種もあるが、大多分は、生活習慣などからくる「細胞のストレス」が原因となる例が多いようだ。喫煙と肉の消費量が、肺がんと大腸がんの発生率とに高い相関を持つ。

生活習慣に非常に気を付けていた私が、度重ねてがんになった心当たりは、今思えば絶対にタバコを吸った経験がなく、酒もそれほど飲んだ覚えがないのに、若い時に随分と雀荘に入り浸りで、副流煙による受動喫煙が原因かと今悔やまれる。しかし、現在は、人間ドックなど、マメに検査を受け、早期発見・早期治療をすれば、完治とはいかなくとも、健常な生活はできるものと確信している。それに加え、何事も前向きの姿勢と気力。そういう心棒が固定していれば、病気の方が尻尾を巻いて逃げていく…と信じている。

細胞の分裂回数の能力からみれば、ヒトの寿命は120歳までは可能と言われる。いわゆる「大還暦」である。実際ロシアの婦人が122歳まで生きた世界記録がある。それを人類は軽薄な文明により、良からぬ生活習慣の多用で、細胞に多くのストレスをかけ、無理に寿命を縮めている。地球温暖化防止対策として、私は「衣食住の簡素化」を挙げているが、それは即、がん予防にも繋がる「定石」とも言えるのではなかろうか。

江戸幕府職制の概要

打田昇三

年末年始などのテレビ番組では高齢者を意識したのか時代物が多かったと思う。中でも江戸時代の話が主になるけれども徳川幕府の職制は「庄屋仕立て」と言われて「単純」でドラマにし易いのかも知れない。単純でも特殊な制度であるから、馴染みは無いと思うので余計なことだが今後もドラマを堪能して頂く為に大正時代に書かれた官職の解説書から徳川幕府の主な役職（劇中に出る頻度の高いもの）を書き出してみた。

先ず「将軍」は征夷大将軍のことで誰が決めたか知らないが源頼朝以来、源氏系の独占になる。徳川幕府では当然ながら徳川一族しかなれない。徳川家康―秀忠―家光―家綱―綱吉（家綱の弟）―家宣（綱吉の甥）―家継―吉宗（和歌山藩主・光貞の子）―家重―家治―家斉（家重の弟・宗尹の子）―家慶―家定―家茂（和歌山藩主・斉順の子）―慶喜（水戸藩主・斉昭の子）と続いた。

「大老」定員は一名、鎌倉幕府の北条氏のように執権職であり最初は堀田、酒井など譜代の重臣が任命されていたが、後に井伊氏の職となった。即闕の官（そくけつのかん）と言って、太政大臣のように将軍が幼少の場合とか特別な場合に置かれたが、適任者が居なければ置かなかった。水戸浪士に暗殺された井伊大老が知られている。

「老中」別名を御年寄衆と呼ばれたが爺さんのことでは無い。執政、宿老、閣老などとも言われ、一万石以上の譜代大名から選ばれていたが、後に二万五千石以上の者に格上げされた。幕政の中心となる職で定員は四～五名、其の中から毎月一人が交代で事務を執り、職務は広範囲であった。

「若年寄」別名を「少老」と言い、老中が主に諸大名対象なのに対して若年寄は旗本を管轄したので「旗本支配」とも呼ばれた。定員は四～五名、大名格でも城を持たない者が充てられた。老中と同じく月番で幕政に関わった。

「奥御右筆組頭（おくごゆうひつくみがしら）」老中の文案を記録し、其れを審議する役であるから重い職務とされた。多い時で三十人程居た奥右筆の長である。現代の内閣書記官長であろうか。

「表御右筆組頭」表御右筆と呼ばれる日記方、家督方、吟味方など各記録係の長である。表御右筆も三十人ほど居た。江戸城内に「御用部屋」が置かれ、其処に居たのであるが機密事項を扱うので出入りは厳しく制限された。

「大目付」定員は数名、監察が本務であるが、諸大名への触れ事、殿中非常時の対応、見回り、評定の立会などを行うほか鉄砲改め、宗門改め＝宗教規制、道中規制から、潰された大名の財産没収など憎まれる仕事が多かったようである。

「御目付」大目付と同じ様な仕事であるが、大目付が老中に属して諸大名対象であるのに対して目付は若年寄に属して主に旗本以下を監察する。監察対象が分かれているため御目付も「御徒士目付」「御小人目付」など身分的区分があった。また目付の下役は江戸城内の火の番を担当していたようで火の番にも格式があったらしい。

「寺社奉行」全国の神社仏閣、其処に仕える神官、僧侶、尼僧から社寺領に暮らす人々、更に徳川氏に縁故のある領地に暮らす庶民、目の不自由な者、音楽家、連歌師、陰陽師、古書鑑定から囲碁将棋に関わる武士以外の者などを支配して其の訴訟を裁判するのが役目なので、町奉行との関わりで面倒なことがあったと思う。此の職務には大名が補されたらしい。

「町奉行」江戸府内の行政・司法・警察などを扱ったが、寺社奉行管轄の神社・仏閣に関わることは除かれた。町奉行所は南北に分かれており南町奉行所は数寄屋橋門内に、北町奉行所は呉服橋門内に置かれて奉行所別に「与力＝家格は旗本の下の御家人」が二十五騎（人）、「同心＝一代限り雇用の下級武士」が百二十人付けられていた。同心は「定廻＝じょうまわり」「臨時廻」「隠密廻＝おんみつまわり」に分けられていた。

また町奉行の支配下に「町年寄＝奈良屋、樽屋、喜多村の三氏世襲」が居かれて命令下達、収税、市制の雑務等を扱った。このほか牢屋奉行の「囚獄」、懲役人を扱う「寄場奉行」などがあった。

町奉行のほか「奉行」と呼ばれた主な職務には「御勘定奉行＝諸国の代官を管轄して収税、役務、出納や幕府領内の訴訟を扱う」「御蔵奉行＝領地の無い旗本に禄米を支給する」「御金奉行―金庫番」「御作事奉行」「御普請奉行」「小普請奉行」などが置かれていたが、訴訟を扱うのは「寺社、勘定、町」の三奉行であり、現代の裁判に相当する事案は此の三奉行が、和田倉門外の「評定所」に集まって決めたらしい。このうち「寺社奉行」は旗本ではなく大名が任命された。

将軍の近くに仕えたのは「御側衆」「御奏者番」「御小性衆」「御小納戸衆」などであるが、忠臣蔵で有名な吉良上野介は「高家」と言って名門・旧家で伊勢・日光などに将軍名代として代参し京都に使いし、公卿との交際を担当した。格式は高いが禄高は低かったから、昔のことなので副収入に相当する賄賂が少なければ、時に相手を苛めることが有ったのかも知れない。

コーヒーと紅茶

打田昇三

現在は危険地域になってしまったが、中東には貴重な遺跡が多いから歴史好きの方は欧州や米大陸よりもシルクロードが通っていた国々を観光されたと思う。

昔のことだが、私もイラン・イラク戦争が終わって直ぐに、どうしてもペルセポリスが見たくて中東戦争後に日本では最初（世界でも二番目）のツアーに加わった。同行したのは主に各旅行社の偵察員らしかった。

かつてイランは米国の有力な同盟国であり、防空センターが置かれた米本土内の広大な某陸軍基地玄関前にはイランの国旗が掲げられていたのを私は見ている。当然ながらイラン国内にも米国資本のホテルが存在した。

それが王政の崩壊か何かで「米国敵視政策」に変わったから米国大使館は閉鎖されて門が釘付けになり、米国系ホテルもイラン人に接収されてしまった。

中東諸国のホテルなどで出される飲み物は「チャイ」と呼ばれる紅茶が主であるが、私は紅茶が嫌いなのでコーヒーを注文することにしている。

首都テヘランのホテルでも同行した方々は紅茶を注文したが私はコーヒーに拘った。ホテル側では困ったらしいが、暫くしてポットのお湯とカップと紙の上に載ったインスタントコーヒーの粉が運ばれて来た。多分、革命で追い出された米国人従業員が残して行ったもので有ろう。その頃は日本でもインスタントが本流では無かった。私は特別待遇の様な気分で、そのコーヒーを味わった。

その頃、イランのテレビでは「おしん」が放映されていて我々は行く先々で「おしんの国の客」として歓迎されたから、ホテルでの我儘も許されたのであろう。今は懐かしい思い出になった。

言葉

白井啓治

言葉を考えなくなった時、詩がうまれる。
言葉を考えると説明が顔を出す。
言葉は、真実は伝えない。
言葉が伝えるのは事実だけ。
真実とは事実と事実の隙間にひっそり隠れてある。
言葉で真実を伝えようとするな。
真実を心に籠めて、
確かな事実としての言葉を紡いでいった時、
言葉と言葉の隙間から真実が顔を出す。
言葉で真実を伝えようとすればするほど
説明が大きな顔をし、
理解を強制し、
納得を求め、
真実は遠ざかっていく。
言葉は、使う人の人生であり哲学です。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四 - （一 - 2）

還御（かんぎょ）のこと

「還御」とは、高倉上皇が無事に厳島参詣を済ませて帰ってきた―という題名であるから、忙しい場合には読まなくても良いと思ったのだが最後の方に「安徳天皇の即位式典には平重盛の遺族たちが父親の喪中のため欠席をした」と言う記事がある。次の章段「源氏揃」では反平家運動の口火が切られる訳であるから、是までは順風満帆で進んで来た平家にも滅亡の予兆を顕す出来事が目立ってくる。此の章段を飛ばす訳にはいかない。

原文は「同廿六日」から始まるが、是は治承四年（一一八〇）三月二十六日のことである。高倉上皇は厳島へ着いた。滞在中の御所として、平清盛の愛人の一人である厳島神社の内侍（巻第一、「吾身栄花」に登場した巫女、清盛の娘を生んでおり、その娘は後白河法皇の後宮に入った）の宿舎が充てられた。上皇は中二日、厳島に滞在してその間に写経・読誦、舞楽などが行われた。

法会の際は三井寺の公兼僧正が導師となった。お供を命じられていたのであろうか、この僧は巻第二「山門滅亡・堂衆合戦」に後白河法皇の導師として出てくる。厳島まで同行させて貰ったから張り切って鐘を打ち慣らし「…九重の都を出でて八重の潮路を分けもって（厳島に）参らせ賜う御志の忝（かたじけな）さ…」と、声高らかに奏上したので、高倉上皇を始めとして一同が感涙を催して拝礼をした。商売上手な坊さんである。

そののち上皇の御一行は厳島構内の社、神殿などに隈なく参詣をされ、本宮から六百メートルほど山を回ってから白糸の滝がある宮に参られた。其の時に公兼僧正が一首の歌を詠んで拝殿の柱に書き付けた。神聖な場所に落書きするのは許されないが歌も下手で「雲井より落ち来る瀧の白糸にちぎりを結ぶことぞ嬉しき」という…お粗末！

それでも高倉上皇は感激して、神主の佐伯景広（さえきかげひろ）に従五位上の位階（常陸国守などと同じ）を与え、安芸国守の藤原有綱を従四位下（神祇官の長官や近衛中将と同格）にして上皇や法皇の許に出仕出来る資格を与えた。さらに厳島神社に置かれていた僧侶（神仏混淆時代なので）の尊永は、僧の最高位である「法印大和尚」に昇任させて貰った。原本に「…神慮も動き、太政大臣の心も働きぬらん…」とあるが、前天皇が神社参拝先で勝手に官位のサービスをしているだけで、別に勿体ぶることでもない。

三月二十九日、高倉上皇の一行は仰々しく船を飾り立てて帰途についた。しかし風が強かったので船を漕ぎ戻して厳島の中央船着場に留まることになった。上皇が暇潰しに「大明神との御名残りを惜しんで歌をつくれ」と命じられたので、傍に控えていた近衛少将の藤原隆房が「それでは」と「立ち返る名残も有りの浦なれば神の恵みもかくる白波」と一首を詠みあげた。すると神様も冗談が好きだったようで真夜中に風が収まってきた。

そこで船を漕ぎ出して備後（広島県東部）国内の敷名港に停泊した。此処には六年程前に後白河法皇が厳島参詣をした際に当時の国司・藤原為成が造った御所があったので、それを平清盛が改修して上皇が泊まれるようにしてあった。しかし清盛のことを恨ん

でいる上皇は、其処へ上陸されることなく多分、御座船の中で過ごしたようである。

上皇は「今日は卯月（四月）一日、衣替えの日であろう」と都の方向に思いを馳せられたので、お供の者たちも酒宴などを開いて勝手に都を思い出していた。丁度、岸辺に色の濃い藤の花が咲いていたのを上皇がご覧になって大納言・藤原隆季に「あの花を誰かに折らせよ」と命じられた。

大納言が船から下を見ると、供に着いて来た太政官の下級役人で中原康定と言う者が小船で本船の側を通りかかったので、それを呼び止めて「藤の花を折ってくるように」命じた。康定は傍らの松の枝に藤を絡めて差し出した。其れを見た上皇が「気が利（き）いている」と褒めて「此の花で誰か歌を詠むように…」言われた。大納言は直ぐに「千歳経ん君が齢（よわい）に藤なみの松の枝にもかかりぬるかな」と詠んだ。その後、上皇の周りに大勢の公卿が集まって（上皇の御機嫌取りで）遊び戯れていた。其の時に上皇が「厳島では白い着物を着ていた内侍（巫子）の一人が大納言（藤原邦綱）に心を掛けたように思えた」と笑いながら話をされたので、それを邦綱が真顔で否定していた。そこに厳島から内侍の手紙を預かった召使がやってきて「これを五条大納言殿に」と差し出したので、一同は「正に其の通りであろう」と興味津津で成り行きを見ていた。大納言が手紙を開けてみると「白波の衣の袖を絞りつつ君ゆえにこそたちも廻れね」と歌が書かれていた。

上皇が「優雅に思われる。是は是非にも返事（の歌）を送らねばなるまい」と言われて、硯（すずり）と筆を下された。そこで大納言は「思ひやれ君が面影立つ波の寄せ来る度に濡るるたもとを」と返歌を送った。やがて船は敷名港を出て、それから備前国小島港（岡山県倉敷市）に着いた。

どうでも良い話だが、天皇を中心とする当時の公卿たちは、無駄で形式的で何の根拠もない権威主義を金科玉条にして何かにつけて歌を詠んだり言葉遊びに終始していたのであろうから、とても国民の為の政治を行う余裕は無い。平清盛は其処に付け込んで権力を手中にしたけれども、結局は「ミイラ取りがミイラになって」滅ぼされる。

治承四年四月五日、穏やかな春の日差しに風も止んで海上も穏やかな中を、高倉上皇の御座船と其れに付き従う船団が雲の波、煙霧の霧の中を滑るように帰還した。時刻は午後六時頃であったが、何事も無く明石の山田の濱に着船し、其処からは輿に乗って福原（神戸）へと向かった。四月六日になると都が目前であるから供の者たちは一刻も早く帰りたいのだが肝心の高倉上皇が慌てない。福原に逗留してあちらこちらを見て回られた。池の中納言と呼ばれた平頼盛（清盛の異母弟）の山荘（現在は荒田八幡として残ると言われる）までご覧になった。やっと七日に福原を出られたのだが、その際に大納言・藤原隆季が上皇の意図を体して清盛入道の家に過分なお礼をしたらしい。上皇は清盛に借りを作りたく無かったのであろう。是だけで平家の命運が傾いていることが分かる。

具体的には清盛が養子としていた丹波守清国（大納言・藤原邦綱の子）が正五位下に、清盛の孫の越前少将資盛が従四位の上に叙された。原文のとおりだと少将なのに近衛中将に上がったことになるが、お手盛りであるから好きなようにすれば…兎に角、厳島帰りの高倉上皇御一行は神戸に寄り道してから大阪西淀川に着き、八日には京都に戻ったらしいが、出発時のように鳥羽殿へ寄ることも出来ず平清盛の西八条邸へ入られた。清盛は福原に居たのであろう。

高倉上皇の厳島帰りから約二週間後の治承四年四月二十二日には安徳天皇の即位式が行われた。平家物語を先取りしてしまうと、実は其の十数日前に巻第一「御輿振」で活躍した源三位頼政が、安徳天皇の叔父に当る以仁王（もちひとおう）に対して「平家打倒」のお墨付きを頂くように画策していたので（次の章段）安徳天皇の即位も無駄になる訳なのであるが平家一族は知らない。本来は天皇の即位は大極殿で行われる行事なのだが、前年の京都火災で焼けた後の再建が出来ていなかったから太政官庁舎（現代で言えば内閣府）で行うように公卿どもが決めようとしていた。それに対して右大臣の藤原兼実が「太政官は臣下の例えで言えば公文所（くもんじょ＝領地・荘園の事務を行う場所）であるから相応しくない。大極殿が使えなければ紫震殿（内裏の正殿）で行うべきである」と余計な事を言ったので、安徳天皇の即位式は紫震殿で行われることになった。

自分たちの意見を否定された公家たちは面白くない。「かつて康保四年（九六七）十一月一日に、冷泉天皇の即位の礼を紫震殿で挙げられたのは、天皇が病気（精神的な）の所為で大極殿に行け無かったからであるから、その例は如何なものか？治暦四年に後三条天皇が太政官庁で即位された際は大極殿が工事中であった為で、何の支障も無かった。その例に従うべきなのに」と不満を漏らしたのだが何時の時代も上司の意見には勝てない。

当日は、高倉天皇の中宮（準皇后）が弘徽殿（こきでん＝皇后・中宮の座所）から仁寿殿（じじゅうでん）に遷り、幼い天皇が即位した。その有り様は誠に目出度い限りである。平家一族はこぞって出仕をしたのだが、宗家である小松殿の公達（維盛、資盛、清経ら）は内大臣・重盛公の喪中であり、喪に服していたので屋敷

に籠っていた。

　此の章段は是で終るが止むを得ない事情とは言え安徳天皇即位式に平家嫡宗の重盛流が出席出来なかったことは何となく気に掛かる。肝心な平宗盛も急病か何かで欠席したような記録もあるので安徳天皇の即位が平家にとって百％の慶事では無かったことが窺える。満足していたのは平清盛夫妻だけであった。次の章段は「源氏揃え」である。平家物語に源氏が揃うのは、下手な例えで恐縮ながら饅頭屋の話に硬い煎餅が出てくるようで甘い話だけでは済まなくなるのである。

源氏揃（げんじぞろえ）のこと

　江戸時代に将軍の側近に奉仕した役人を「側用人（そばようにん）」と言ったが、平安時代に天皇の側用人のような地位に在ったのが「蔵人（くらんど）」であり現代的に言えば秘書官である。本来は天皇の秘密を守るために嵯峨天皇の時代（この時代は天皇にも敵が居た）に置かれたのである。

　高倉天皇の即位が無事に済んだ或る日、蔵人の一人である安房守・藤原定長が、即位式の模様など儀式が無事に済んだ様子をビデオに記録して平清盛の北の方に報告したから大いに喜ばれた。この定長は後に衛門権佐（えもんのごんのすけ＝従五位相当）に補されている。上司へのゴマ摺りは昔も今も大事な儀務（義務では無く）である。この様に目出度いことがあったけれども（それは平家一門の内部だけに限られたことであり）実は世間が穏やかでは無かったのである。

　その頃、一院（後白河法皇）の第三皇子である以仁王（もちひとおう）が男盛りの年齢に達していた。第一皇子が二条天皇で、第七皇子の高倉天皇も皇位に就いているから「ナンバー3」でも希望が持てそうではあるが、高倉天皇は母親が平氏であったから別枠である。何よりも後白河法皇自身が「天皇に相応しくない！」と言われていたのであるから、母親が加賀大納言季成の娘という中途半端な身分である以仁王が天皇になれる確率は最初から高くなかった。しかし可能性が全く無かった訳では無い。以仁王は三条高倉という場所に住んで「高倉宮」と呼ばれており、永萬元年十二月十六日には十五歳になっていた。同じ高倉でも弟は天皇になったのに、以仁王はいそうろうの身分の侭で放っておかれたのである。

　それでも、近衛天皇の皇后で従姉妹に当る藤原多子（巻第一「二代后」主人公、此の時は太皇太后）の大宮御所で元服だけはさせて貰ったのが儲けもので、言葉は悪いが皇族として「飼い殺し」で置かれた。お世辞で有ろうと思うが平家物語には「御手跡美しくあそばし、御才学すぐれて…」とある。頭が良くてお習字が上手なのであるから支持者は「天皇にも」と思っていた。ところが是を憎んだのがライバルに当る高倉天皇の生母・建春門院（後白河法皇の第二皇后、平家一門）であり、以仁王は抑留生活に近い状態に置かれていたらしい。政治活動は出来ないから得意の書道で気を紛らすか、ホラも吹けないから名月の夜には笛を吹く、などして無駄に暮らしているうちに治承四年には人生盛りの三十歳になっていた。

　此処で登場してくるのが其の頃に近衛河原という所に屋敷を持っていた源三位入道頼政である。この武将は、平家全盛時代に化石のように生き残った清和源氏の嫡流であり、既に平家物語巻一「御輿振」で登場し内裏に押し寄せて来た僧兵軍団を上手く扱って平家方に融通した武将である。恥を忍んで平家に服従し従三位を貰ってはいたが家系から言えば、二も一も狙える身分であるから不満が無いと言えば嘘になる。その源三位入道頼政が、気の毒な身分の以仁王に着目した。平家物語には頼政が予告も無しに以仁王の許を訪れて平家への謀叛を勧めたように書いてあるが「源平盛衰記」では一頭の名馬が原因になっている。その話のほうが人間的、具体的であるから、その筋で話を進めさせて頂くと、次のような次第になる。

　頼政の息子は仲綱と言い、当時は伊豆守に任官して居た。伊豆と言えば源頼朝が流されていた場所であるから後の「頼朝決起」と関わりが有りそうだが証拠が無いから触れない。此の場合も仲綱は現地に居なかったと思われる。然し国守であるから現地から賄賂のような贈り物が届く。或る日のこと伊豆から名馬が届いた。仲綱は「木の下」と名付けて此の名馬を秘蔵していた。是を平家の頭領である平宗盛が知って「見せろ」と言い、次に「貸せ」と言って強引に取り上げてしまった。更に素直に貸さなかったと言って、馬に「仲綱」と名付けて「仲綱を引き出せ！」「仲綱をムチで叩け！」などと侮辱をした…当然だが源仲綱と父親の頼政は平家に対する恨みを募らせた―という。此の話の真偽は不明だが平家全盛時代に細々と生きる源氏にストレスが溜まることは想像できる。

　治承四年四月の或る夜（具体的には高倉上皇らの厳島参詣期間中と思われる）源三位入道頼政が以仁王の居所を密かに訪れた。周囲には誰も居らず盗聴器も仕掛けて無いことを確認してから頼政は以仁王の傍近くに寄り大事を告げたのである。なお源三位入道頼政が決起勧誘の相手として以仁王を選んだのは、不遇であった王の庇護者的立場に居た非平家系の二人の女

性皇族「美福門院（びふくもんいん＝近衛天皇生母・藤原得子）」及び「八条院（はちじょういん＝鳥羽天皇三女・広大な荘園の持ち主）」に入道頼政が仕えたことが有ったためと考えられている。頼政は以仁王に説く。

「貴方様は天照大神から四十八代の末裔である神武天皇から七十八代に当たられるお方です。本来ならば皇太子に立てられ、天子の位にも就かせられる御身分なのに、三十年もの間、単なる宮として放置されて居られます。是を残念なことと思われませんか？今の世の有り様を見ますに、表面上は穏やかなようですが、内心は平家のみの繁栄を快く思わぬ者ばかりです。良い機会ですから此処で反乱を起こして平家を打倒し、鳥羽殿に抑留されている後白河法皇を救出して其の御心を休ませられると共に以仁王が皇位に就かせられて善政を敷かれることこそ父帝への何よりの御孝養となるのでは有りませんか？…もし、そのような御心がお有りでしたら「平家打倒」の令旨（りょうじ＝天皇以外の皇族が出す命令書）をお下しください。そうすれば是に賛同して決起する源氏が各地に居ります（本当かどうか疑わしいが…）」

さらに言葉を続けて頼政は次のように具体的な説明をした。「反平家の行動に参加が見込まれる武士たちは…先ず源頼光の子孫で美濃源氏（出羽国前国司）源光信の子供たち伊賀守光基・出羽判官光長・出羽蔵人光重・出羽冠者光能、熊野には六条判官為義（頼朝の祖父）の末子である十郎義盛（後に行家と改名）が隠れております。摂津国には多田蔵人行綱が居るのですが、此の男は新大納言成親が謀反を企てた折に一味に加わりながら途中から密告した当人ですから問題外です。しかし其の弟の多田二郎朝実と手島の冠者高頼は兄と違って信用が出来ます。さらに同系の太田太郎頼基、河内国では武蔵権守入道義基、その子の石河判官代義兼、大和国では宇野七郎親治の子で太郎有治、

二郎清治、三郎成治、四郎義治、近江国には山本、柏木、錦古里、そして美濃・尾張には山田次郎重広、河辺太郎重直、泉太郎重光、浦野四郎重遠、安食次郎重頼、その子・太郎重資、木太三郎重長、開田判官代重国、矢島先生重高、其の子・太郎重行、さらに甲斐の国には甲斐源氏と呼ばれた逸見冠者義清、其の子・太郎清光、武田太郎信清、加賀美二郎遠光、同小次郎長清、一条次郎忠頼、板垣三郎兼信、逸見兵衛有義、武田五郎信光、安田三郎義定、また信濃国には大内太郎維義、岡田冠者親義、平賀冠者盛義、其の子・四郎義信、木曾山中には今は亡き帯刀先生義賢の次男・木曾冠者義仲が居ります。伊豆国には流人として前右兵衛左頼朝が旧臣の庇護を受けて健在であり、常陸国住人では信田三郎先生義教と佐竹冠者正義、其の子・太郎忠義、同三郎義宗、四郎高義、五郎義季、遠く陸奥国には故左馬頭義朝の末子・九郎冠者義経…これらは皆、六孫王の苗裔（びょうえい＝子孫）多田新発意満仲の後裔であります。（六孫王とは清和天皇の六男・貞純親王の子・源経基のことを言い、多田新発意満仲とは経基の子で摂津多田に住み仏門に入った源満仲のことである）

かつて源氏一族（此処に挙げた者たち）は平家と同じように朝敵を平げ、官位昇進に望を掛けて競い合っておりましたが、今は平氏と源氏の差が雲泥のように隔てられてしまいました。平氏は主の如く、源氏は従者よりも劣る扱いを受けております。国にては国司に従い、庄にては預所（領主の代理人）に使われて、公事や雑事に駆り立てられて心が休まる暇もありません。平家全盛の時代ですから致し方は無いのですが、それが残念でなりません。（以仁王におかれても同様の思いをされておられることでしょう）

そこで以仁王から〝平家打倒〟の令旨を戴くことが出来ますならば、先ほど述べました諸国の源氏系武士たちが夜を日に継いで馳せ登り、平家を滅ぼすのに長い日時を要しません。私も後期高齢者になりましたが、まだまだ元気です。子らを引き連れて軍勢に加わります…」

源三位頼政は年齢にも似ず、一気に申し述べたのであるが以仁王にしてみれば今までは夢にも見なかったことを言われたので、返事の出来る段階では無い。平家が怖いから黙っているしか無い。

其の場は何とか逃げたが、程なく頼みもしないのに「人相見の達人」と言われた少納言・藤原維長がやって来た。此の人は白河上皇に信任されて阿古丸大納言と呼ばれた藤原宗通の孫・備後国守季通の子である。世間から「相（そう）少納言」と呼ばれていて、公務員の仕事よりアルバイトの人相判断で知られた公卿らしい。以仁王の顔を見てから計画どおりに驚くそぶりをして「誠に（天子の）位に就かせ賜うべき相をお持ちです。それを捨ててはなりません」と勿体ぶって申し上げた。

其処まで言われると「？」が「！」に変わり心中に妙な自信が湧いてくる。すかさず源三位頼政が勝手に太鼓判を押したから以仁王も「確かに其の通りである。是は天照大神のお告げであろう」と責任を神様に押しつけて重大な決意を固めたのである。頼政は早速、熊野に潜んでいた源氏一族の新宮十郎義盛を呼び寄せた。源頼朝には叔父に当たる人物である。以仁王は昨日までのイジケタ居候生活を振り捨て、既に即位したような気持ちで十郎義盛を蔵人（秘書官）に任命し、名を義盛から行家に替えさせた。新宮十郎行家は「平家打倒」の決起を促す以仁王の令

旨を伝える使者として東国に派遣されることになったのである。

治承四年四月二十八日、新宮十郎行家は密かに都を発って東へ向かった。先ずは近江国から始めて美濃、尾張と「源氏名簿」に基づくクーデター参加者の募集を続け、五月十日には伊豆の北条に到着した（…と、原本にある）此の時、源頼朝は伊豆に流罪となっている身分であるが、実質的には地侍の北条氏に庇護された状態であったと思われる。平家物語には無いが、頼朝を監視する役目は伊豆の伊東氏と北条氏とが命じられていた。

始めは伊東祐親の娘が頼朝と恋に落ちて一児を儲けたのだが、平家に知られることを恐れた祐親は娘を頼朝から引き離した上で、幼児を殺害し頼朝の暗殺を企てた。頼朝は危機一髪で難を逃れ北条氏を頼ったのである。北条氏は頼朝を受け入れ頼朝を婿とする覚悟を決めたから頼朝の決起は北条氏も賛同してのことと推測される。話のツイデに少し脱線させて頂くと、源頼朝と伊東祐親の娘（曾我兄弟の伯母）との間に生まれた（殺されかけた）幼児の子孫と称する武将が江戸時代に石岡市の隣村で高級旗本として小藩を形成しており明治維新まで存続したから、源氏はしぶとい。

話を戻して新宮十郎行家は伊豆から常陸国へ来て現在の美浦村から稲敷市辺りに隠れていた兄の信太（志田）三郎先生義教を誘った。兄と言っても血縁は無かったらしい。あの近辺は鳥羽天皇の皇女で膨大な領地を相続した八条院の領地であり信太義教は二条天皇に仕えていた関係で、其処に隠れていられたのであろう。平家打倒の兵は挙げたけれども頼朝には従わずに後に小山、下河辺、八田などの武将に討伐された。桓武平氏の芽とも言える筑波山麓の多気大掾（たけのだいじょう）氏は負け組に入ったらしく、それ以来、大掾系は石岡に来ても平家本流と同じく景気が良くない。

地方の事情はどうでも大きな任務がある新宮十郎行家は、更に甥に当る木曾冠者義仲を訪ねる為に東山道を木曾山中へと向かって行った。勿論、平家討伐の決起を促すためであるが、誰にでも都合があるから木曾義仲が兵を挙げるのは「巻六」になってからである。

その頃、新宮十郎行家が留守にしていた京都では「反平家運動」に関わる一大事が発生していた。

熊野の別当（責任者）である湛増（たんぞう）は母親が源為義の娘であったから源氏に心を寄せていると見られていたのだが、じつは妹が平清盛の異母弟・忠度の妻となった為に平家派に鞍替えをしていたのである。その湛増が、何処から聞いたのか新宮十郎の秘密任務を嗅ぎつけてしまった。源氏との関わりを考えれば、黙って知らぬ振りをしていれば済むことであるが、一応は僧侶なのに欲を出して大騒ぎをし出した。それも中途半端な情報に依っているから始末が悪い。

「新宮十郎義盛が、高倉宮の令旨を貰って美濃から尾張の源氏に触れ回り、謀反を起こすようである。そうなると那智や新宮の者たちは、きっと源氏に味方をするであろう。此の湛増は平家の御恩を山のように受けているから、平家に背くようなことはしない。那智や新宮に先制攻撃を掛けて一筋の矢でも放ち、それを平家に報告しよう…」と勇ましく決意を固めた。

平家物語原本には日時の記載が無いので確定は出来ないが多分、治承四年五月初旬に湛増が率いる完全武装をした一千人の軍勢が熊野を発して新宮の湊へ向かった。是までの流れであれば、平家方が多数の軍勢を集めて一気に反乱軍を鎮圧するのであるが、時の流れと言うのは恐ろしいもので平家に忠節を尽くそうと出かけた湛増の前に立ち塞がったのは二千の軍勢である。つまり湛増軍と同じ様に熊野に関わりのある僧兵の中で湛増の次に別当になったと思われる鳥居の法眼（ほうげん＝法印に次ぐ僧の位）や高原の法眼が、新宮系の神職である宇井、鈴木、水屋、亀甲などが抱える武士団と共に待ち構えて居たのである。総指揮官は鳥井の法眼の兄で源為義の娘を母としている。

当時の合戦の決まりで両軍が一斉に射撃を開始して戦闘が展開されたのであるが、単純に計算しても千人が放つ矢と二千人の矢数では差が有る。三日間戦って熊野湛増軍は壊滅的打撃を受け僅かに生き残った者は熊野本宮へ退却していった。

此の時は勝ったが結果的に言うと以仁王を担ぎ出して挙兵した源三位頼政らは敗北する。しかし八月十七日には伊豆で源頼朝が挙兵し、それを機に時代の流れは平家から源氏に替わってくるのである。此の章段は是で終り、次は「鼬（いたち）之沙汰」からである。平家の大事に、なぜ鼬が出てくるのか良く分からないが、鼬は縁起が良いとも悪いとも言われるから「どうなるか分からない」という暗示かも知れない。登場人物も優雅な平家一族だけ、という訳にはいかなくなる。

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/